

I. 一般目標 (General Instructional Objective)

本研修の目的は外科医としての基礎的知識・技術を修得し、かつ小児における外科的疾患を扱える医師を養成するためのものである。小児外科独自の疾患、手術、管理だけでなく、広く一般外科の基礎を身につけながら、小児の疾患を通して親との関わり、医療スタッフとの人間関係等、医師としての基本的な心構えを身につける。

II. 行動目標 (Specific Behavioral Objectives)

入院患児を担当する他、外来患児の診察にあたり、外科医としての基本姿勢と基本手技を学ぶとともに、小児外科における専門的診療内容を経験しながら外科的手技を修得する。

① 診療の基礎を修得する

- ・保険診療の基礎(保険医としての正しい姿勢、カルテの記載法)
- ・患児・家族への説明(インフォームド・コンセント)
- ・紹介状、診断書の記載法
- ・患者死亡時の対応
- ・paramedicalとの良好なコミュニケーション

② 診断技術・検査法を修得する。

- ・患児との医療面接と保護者からの病歴聴取
- ・小児の一般診察手順(小児の胸部・腹部身体所見診察)
- ・外科的疾患におけるX線診断(胸部・腹部X線写真他の読影)
- ・腹部エコーの手技
- ・エコー、CT、MRIの読影技術
- ・消化管検査(消化管造影・pHモニター・内圧測定など)
- ・検査時の静脈麻酔

③ 術前・術後管理を修得する

- ・呼吸循環管理
- ・鎮静鎮痛管理
- ・体液管理(輸液管理の基本)
- ・栄養管理(静脈栄養と経腸栄養の基礎と臨床)
- ・創傷管理

④ 外科的手技を修得する

- ・基本的縫合手技
- ・中心静脈カテーテル挿入手技
- ・開腹および開胸手術時の基本手技
- ・小児救急医療の基本処置

III. 方略 (Learning Strategies)

全ての研修業務を3年目以降の専修医とペアを組み行う。その上に上記の指導医の中から選ばれた担当指導医がおり、直接指導や評価を行う。指導医はキャリア7年以上とする。本研修では、病棟・外来でのトレーニング、カンファレンス、学会参加などで1例1例の症例を経験して学んでいく。

IV. 経験できる疾患・手術など

小児外科では新生児から中学生までの外科的疾患患児が基本的な対象症例となるが、脳性麻痺などの神経疾患を有する小児が成人した後に呼吸器疾患や消化器疾患を有しているトランジション症例も対象となる。また、対象臓器、部位は心臓、骨、頭以外のすべてであるため、幅広い年齢と広範な臓器に対する疾患と治療(手術)の知識が必要となる。新生児の先天奇形から成人の逆流性食道炎まで、交通外傷から小児悪性腫瘍までと、様々な症例を経験する。

- ・先天性腸閉鎖症などに対する新生児手術
- ・鼠径ヘルニア、停留精巣に対する手術(腹腔鏡手術を含む)
- ・消化管疾患(メッケル憩室や虫垂炎など)に対する開腹・腹腔鏡手術
- ・胆道閉鎖症、胆道拡張症に対する胆道再建手術
- ・喉頭機能不全に対する手術(喉頭気管分離術など)
- ・肺疾患(肺分画症やCCAMなど)に対する開胸・胸腔鏡手術
- ・小児悪性腫瘍(神経芽腫やWilms腫瘍など)に対する腫瘍摘出手術

V. 評価 (Evaluation)

Minimum EPOC、症例発表による自己評価・指導医評価。
指導医・看護師などによる形成的評価。

VI. 指導者と研修施設

- | | |
|----------|-------------------|
| 1. 診療部長 | 八木 実 |
| 2. 指導責任者 | 深堀 優 |
| 3. 指導医 | 石井 信二、橋詰 直樹、東館 成希 |
| 4. 研修施設 | 久留米大学病院 |

VII. 週間予定

| | |
|-----|---------------|
| 月 | 8:00 医局会 |
| | 9:00 教授回診 |
| | 13:30 カンファレンス |
| 火～金 | 9:00 手術 |
| | 13:30 病棟検査 |
| 土 | 8:30 病棟回診 |

